紙の書籍と電子書籍の違いから見る使い分けについて

鈴木智也

本論文では、紙と電子の書籍の使い分けについて述べた。近年多くの書店が閉店に追いこまれていたり電子書籍を利用する人をよく見かけるようになった。そこから紙の書籍が年々使われなくなっていると感じ、このテーマに決めた。使い分けを考察するに当たり出版業界、図書館、教育業界の 3 つからメリットやデメリット等を調べた。

まず、出版業界から分かった紙のメリットは一覧性、保存性、記憶の残りやすさがあった。反対にデメリットは、入手のしづらさ、保管場所があった。電子書籍のメリットには簡単に扱える、多くの人に働きかけられるというものがあった。デメリットにはインタネット環境が必要、眼への疲れ、サービスが終了している可能性の 3 つがある。これらの内容からジャンル、場所、時間によって使い分けができると考えた。

図書館では、利用者が何を目的としているのかを調べた。その結果、本を無料で読むことができる、豊富な資料がある、場所として快適であるという点が挙げられていた。また、電子図書館のメリットには 24 時間 365 日どこでも利用できる、障がい者も扱えるという点があった。それに対しデメリットは著作権の処理が必要、費用が掛かるの 2 つがあった。このことから電子化できない資料を保存しておくためであったり、障がい者に読書ができる環境を提供するといった使い分けができると考えた。

教育業界では現在デジタル教科書がどのような影響を与えているのかを調べた。その結果、デジタル教科書は姿勢や目と教科書の距離が適切でない場合、紙の教科書よりも悪影響であることが分かった。また、記憶の残りやすさは紙の教科書の方が高いことも分かった。また過度な ICT 教育は成績に悪影響であるが、適切な場合は良い影響だと報告されていた。これらのことから、紙の教科書とデジタル教科書を併用することが重要だと考えた。

最後に、電子書籍全体にかかわる問題としてデジタルデバイド（情報格差）があり、解決策として国が策を講じることが必要だと言える。また紙の書籍と電子書籍の使い分けを考えた際、いったい何のために書籍を利用するか等の目的を把握することが重要であると言える。